



ゲゲゲの～

神戸大学経済経営研究所
所長 下村研一

2010年の「新語・流行語大賞」に「ゲゲゲの～」が選ばれた。「ゲゲゲの鬼太郎」の作者水木しげる先生ご夫妻の若い頃をモデルにしたNHKの連続ドラマ「ゲゲゲの女房」の人気によるものだが、この「ゲゲゲの鬼太郎」という作品とその背景をめぐって次々と生まれる新しい切り口の多さ、そしてすべての切り口の面白さは永遠に尽きることがない。

「ゲゲゲの鬼太郎」、「サザエさん」、「ドラえもん」。私はこの“国民的アニメ三作品”を小学校入学前後からそれぞれ「少年マガジン」「朝日新聞」「小学一年生」に漫画の形で連載されていた当時リアルタイムで読んでいた。これらの作品がそれから40年後も、いや40年前には想像もつかないくらい社会に強く支持されていることを折に触れて感慨深く思い、これらの作品の素晴らしさと作者の水木先生、長谷川町子先生、藤子・F・不二雄先生への尊敬の念を新たにしている。時代が変わり子供たちが入れ替わっても、かつて子供たちだった大人たちが再び見ても、良いものは良いと評価されていることがよくわかる。

その中でも「ゲゲゲの鬼太郎」は他の二つの作品といくつかの点で全く違っており、これらの違いは大人になった私から見ても大変興味深い。その一部を取り上げよう。

この3作品の登場人物はほぼ不動のメンバーで、完全な「ファミリー」を形成している。これらのファミリーだが、サザエさんファミリーはまさに家族、ドラえもんファミリーは家族と友達であり、連載の最初から登場している。そこで質問である。鬼太郎は目玉親父とは親子であり、ねずみ男と猫娘とは友達であったが、レギュラーの4人の妖怪たち（子なき爺、砂かけ婆、一反木綿、ぬりかべ）とはどのような経緯で仲間になったかご存知だろうか。答えは「新聞広告による一般公募」である（「鬼太郎」の復刻本の「妖怪大戦争」の章を読めば今でもわかる）。鬼界ヶ島という島が外国からきた妖怪に占領されたため、鬼太郎はその退治のため日本の妖怪を連れて行くことにした。助けを求めに来た島民の少年が持っていた金の板を報酬にすることを条件に新聞で公募したところ、審査会場の墓場に日本中から妖怪が集まった。厳正な審査の結果その中から選ばれたのがこの4人である。

年齢と性別に無関係であること、鬼、河童、天狗のような日本を代表する伝統的な妖怪でないことに注目されたい。彼ら4人は有名なおとぎ話や大きなお祭りなどにも登場せず地域限定でその存在が語り伝えられてきた妖怪である。今でこそ幼稚園児でも知っている全国区の妖怪であるが、この公募で選ばれる前までは全くの無名の存在であったと思われる。「実力主義」。連載当時の高度成長期にぴったりの採用方式であった。

次は、鬼太郎ファミリーの最大の特異性であるねずみ男の存在である。サザエさんファミリーには基本的に紛争はない。ドラえもんファミリーでのジャイアンとスネ夫の悪さも

子供のいたずらの範囲であり、外部からの敵に対しては必ず仲間と一致団結する。ところが、ねずみ男の私利私欲追求のえげつなさは限度を超えており、鬼太郎をはじめ仲間達が劇中で煮え湯を飲まされた回数は数え切れない。そもそも日本各地で妖怪の悪事に困って鬼太郎のところに手紙で寄せられる相談も、鬼太郎が仲間と遠路はるばる出向いていったら、長年眠っていた妖怪をねずみ男がわざわざ起こしていたり、静かに暮らしていた妖怪にねずみ男が利益になりそうな悪事をけしかけ組んでいたりとというものが少なくない。それどころか、鬼太郎が妖怪と戦っている途中で、いとも簡単に鬼太郎を裏切り妖怪側につくこともある。統計を取ったことはないが、鬼太郎の妖怪退治の記録でねずみ男が「原因を作った」、「相手妖怪と最初から組んでいた」、「途中で鬼太郎を裏切った」のいずれかにあてはまるものは全体の8割近くではないかと思う。

だが、このねずみ男の存在が日本人の昔ながらの妖怪観と鬼太郎の勧善懲悪の世界とを両立させている。「鬼太郎」に登場する妖怪のほとんどは日本のどこかで古くから存在が語り伝えられ、神秘性を持ち、中にはその地域の守り神とされているものもある。一方子供たちは鬼太郎が妖怪といかに戦って勝つかを毎回楽しみにしている。このジレンマにねずみ男がいることにより、「いちばん悪いのはねずみ男」という構図が生まれる。つまり、新しく登場する妖怪は元々は悪者ではないが、ねずみ男のせいで正義の味方鬼太郎と戦うことになるため、戦いの後にさほど悪い印象は持たれない。さらに鬼太郎は毎回妖怪との戦いにあざやかに勝利し、何度裏切られてもねずみ男をいつの間にか許してしまうため、鬼太郎は強さと正しさに加えて限りない優しさまでも兼ね備えていることが子供たちに伝わる。ねずみ男は妖怪と鬼太郎の両方の引き立て役なのだ。私は子どものとき、鬼太郎の一話の中で砂かけ婆が「日本で脇役をやらしたら宇野重吉かねずみ男か」とつぶやく場面を読み、深い意味がわからなかったが、それから40年以上経った今、彼女の台詞の真意がわかった気がする。

最後になるが、「鬼太郎」のもう一人の名脇役目玉親父の声を1968年から担当されていた田の中勇さんが今年の1月に亡くなられた。このニュースを知り私は本当に悲しかった。田の中さんは間違いなく「ゲゲゲの鬼太郎」の長年の歴史と衰えない人気への大功劳者であった。いろいろな場所で目玉親父の絵を見る度に、自然と田の中さんの声が聞こえる。ここで改めて田の中さんの偉大な貢献に敬意と謝意を表し、ご冥福を祈りつつ本稿を閉じたい。